



Title	言語・社会・個人
Author(s)	武居, 正太郎
Citation	人文・社会科学研究报告, 3, pp.23-26; 1953
Issue Date	1953-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10069/33839
Right	

This document is downloaded at: 2020-11-25T02:08:29Z

大塚高信博士は文法論（「英語學論考」所收）に於てソッシュー尔的な言語指定の反対者の或ものは「知識言語と云うものが個人を離れて客觀的に存在すると吾々が思つて居るやうに誤解して居る」と述べて一応自己の立場を明にして居られる（一）。

中島教授は「意味論」に於てソッシュー尔的のラングを鋭く批判されたが、前掲の大塚博士の文法論には中島説を批判した所が少なからずあり、これによつて博士の「知識言語」なるものの正体を我々は察知することが出来る。

中島教授は $1+1+1+1+1+\dots=1$ （繪圖 yayay ）と云う公式で示される如きソッシュー尔的の言語觀を批判し、數個のボールの斜面轉落や兵隊の行進の例をあげて多數の個が同一の共通性質を持つことが不可能であるとされた（二）に對し、大塚博士はこれを可能なりとし、其処に共通要素を見ないとすれば概念構成はどうして生ずるかと反問して居られる（三）。

此処で問題になるのは「同一共通性質」なる語の概念規定である。大塚博士は甲の知識言語と乙の知識言語は同じと云うよりも酷似したものであることを認めて居られる（四）のであるから、博士の云はれる「同一共通性質」なるものの概念は嚴密ではなく、中島教授の「種的に等同な性質」に當ると考へて支障なからう。我々は此処で同一共通性質なるものについて一応考へ直してみる必要があると思う。我々が、

$a(x+y) > b(x+y)$ なる不等式から $a > b$ の結論を得るには $(x+y)$ が両辺にあることに着眼する。然しながら、左辺の $(x+y)$ と右辺の $(x+y)$ とは価が等しいとは云へるが、それだからと云つて全然同一で

あると云うことにはならない。同じく千円であつても私のポケットに在るのと貴方の財布にあるのとは全く別物である。此等は $2(x+y)$, $1000 \times n$ の如く計算が出来るが、眞の同一物は此の様な計算を許さない筈である。かくて、「同一共通性質」なるものを嚴密な意味に解釈すれば、多數の個人が同一なる「知識言語」を共有する等とは云ひ得ないのである。

次に大塚博士は中島教授が示された処の「同時に個的でもあり、一般的でもあるものはあり得ない」と云う矛盾律（五）に對抗して「家康も人間である」と云う命題を例にとつて家康は個的であると同時に一般的であると云はれるのであるが（六）、此の反論も亦むなしと云うべきであらう。人間なる語は個人を指すこともあり、また此の人間でもなく、あの人間でもない人間、即ち概念としての人間を表はす語でもある。家康は何処までも個としての人間であつて、此の人間でもなく、あの人間でもない人間ではない。家康は人間なる語によつて呼ばれる存在の一つである。唯それだけのことである。家康と云う存在を我々が人間と呼ぶのは、人間と呼ばれる他の個々の存在との諸種の關係に於てであり、また同時に人間と呼ばれない存在との諸種の關係に於てである。更に別の例によつて考へよう。我々は字が上手だとか下手だとか云う。それは各人の書く文字が夫々異つていと云う意味をも含んでいる。私が書く処の字と云う文字は貴方が書く処の字と云う文字と同一であると云うことは出来ない。而も私が字と書いて貴方がそれを学の字として受容するのは其処に種的な等同性があるからである。学の字は何処までも学の字であつて個的な文字であり、一般的な文字ではない。家康が個的であると同

時に一般的であると主張するのは英文法は一般文法であると云うに等しい詭弁ではあるまいか。

大塚博士は「知識言語」なる概念は成立すると云はれるが(七)、中島教授が述べて居られる如く(八)、概念が成立すると云うことは其のものが実在すると云うことではない。博士は This is a beaver. と云う表現は一度も聞いたことはなくとも、beaver と云う語を知つて居れば此の表現が創造でき、聞いた人にもそれが分るのは背後に知識言語が隠然として働いて居るからであると云はれる(九)。然しながら博士は一方に於ては個々の人は夫々異つた方言を有するとみなさなくてはならぬと云うのであるから(一〇)、博士の「知識言語」は個人によつて異なる訳である。さうだとすれば個人間の相互理解の媒体としての知識言語なるものは一体何処に其の座を占有するのであらうか。而も博士の「知識言語」は個人のと団体のと二つあるらしいが(一一)、隠然たる働きをするのは一体どちらの方であらうか。また我々が或語を知つて居るとはどの様なことであるのか。

満七才の女兒が或時さも重大な発見をしたと云はんばかりに、仲間との遊びを止めてあたふたとその父親の処にやつて来て次の様な報告をした。

「アンネー、けさえチャンノネー、アシタ、マ、ゴトシタネートユーノヨ。キノーマ、ゴトシタトニ。」

けさえちゃん満三才の女兒である。此の場合けさえちゃんはアシタと云う語を一応知つては居るのである。唯彼女がアシタなる語によつて意味する処は他の多くの人々の言語習慣と対照すれば特異的であるまでのことだ。けさえちゃんは何故キノーのことをアシタと云つたのであるか。彼女は赤い下駄を父親にねだつた。そして「アシタ、買つてあげる」との言葉を得た。彼女はアシタを待ちこがれ、そしてアシタが来た。彼女の望は叶えられた。喜ばしきアシタであつた。現実的にはそのアシタ

は過ぎ去つた。それは今日になり更に昨日になつたのである。然し彼女の心にはアシタと父親が呼んだ日、彼女の希望が実現した日が深く印象されて居たのである。それは現実的には昨日になつて居ても彼女の心の中では依然としてアシタと云う日であつたのである。

概念が個人によつて異なることは大塚博士もこれを認め、文の定義が多教生じた原因の一つとして「言葉と云うものが必然的に有つて居る処の曖昧性」をあげて居られる(一二)。言語理解の根拠として「隠然と働く知識言語」を認める博士が一方に於て言語の必然的曖昧性を述べて居られるのは大きな矛盾ではなからうか。曖昧性は理解の根拠にはなり得ないであらう。言語活動に於て我々は粗畧なる暗示を授受しているにすぎない。時枝博士が説いて居られる様に、聴者が話者から受容するのは音声だけであつて、話者から聴者が受容したと考へられる意味は聴者自身がこの音声の聯合によつて喚起した処のものなのである(一三)。個人間の言語的理解成立の根拠は我々の言語習慣の種的等同性に求むべきであらう。それでは其の種的等同性は何に由来するか。これに答える前に我々の母語習得は如何にして行はれるかを考へてみなければならぬ。

我々の母語習得過程は他人の言語を聞くことから始まる。此処に我々の言語習慣の社会性が根ざして居る。我々は母語を記憶するために数知れぬ経験を重ねなければならぬ。此の経験は他人との交渉によつて得られる。交渉の相手はあくまでも具体的な人間であつて、社会一般と云うが如き概念的なものではない。我々は語彙が貧弱だとか豊富だとか云う。これは言語的経験の深淺をも意味するのである。新聞雑誌等を読みラジオ等を聞くことも一方的ながら他人との言語的交渉であることに変りはない。記憶には個人差がある。個人の生活環境、職業等も異なる。かくて個人々々の言語は夫々異なるのである。

満五年八月の女兒が食事中「やつと、あ茶を飲むことをおぼえた」と云つて満七才の姉に笑はれた。妹の「おぼえた」は「思ひ出した」の意味

で、その前に彼女は母親にお茶を要求し、注いでもらつたまゝ、他事に氣を取られて、しばらくそれを飲むことを忘れて居たのである。彼女は笑はれたことによつて「覺えた」の使用がまづかつたと悟つたのか、「思い出した」のでせう」と云う姉の言葉を「うん」と素直に肯定した。此の様な現象を社会学的な立場の言語学者は言語の拘束力の作用であると言つて、実は此の時の姉の訂正的言辭の根柢は彼女自身及び彼女の交渉経験範囲内の人々の言語習慣と異つて居ると云うことにすぎない。此の例は新しい語彙の習得とも考えられ、またウロオボエの訂正であるとも考へられる。

「わら製品」「吠」の表象はあるが、また其の物の名称はかつて耳にした覚えはあるが思ひ出せない。満九才の女兒は此の場合その物をあらはすのに次の表現を用いた。

「ゴザノチイサカトガアルジャロガ、アン、ムシロンゴッアルトガ。アン、フクロンゴッナツトガ。」

これをスローモーション映画の様に解説すると次の様になるであらう。彼女は先づ自分の表象して居るものと類似の表象を持つ「ゴザ」を思い浮べた。これは彼女には既知のものである。然し今彼女が意圖して居るものと「ゴザ」とは、彼女にとつては先づ大きさが違ふ。それ故に彼女は、これに「小さい」と云う形態上の限定を与へた。然しそれでも未だ彼女の意に満たない。「ゴザ」は彼女の経験ではわら製品ではなかつた。其処で更に「ゴザ」に似たわら製品である「ムシロ」を思い浮かべた。「ムシロ」も亦彼女に既知のものである。然しながら「ムシロ」も彼女が今考へて居るものとは違つて居る。同じくわら製品ではあつても形態が違ふ。此処で彼女は彼女が考へて居るものと形態上の類似性を持つ袋を思い出す。さうして「袋の如くなつて居る」と云う形態上の制限を加える。「席の如きもので袋の如くなつた物」と云えば彼女が今表象して居る物を一番よく表はして居るのである。彼女の今までの経験から

すれば、これ以上に細部に亘る限定が出来なくはない。然し其の限定は相手の理解を予想した限定でなければならぬ。例えば或女の顔を説明するのに木暮実千代の様な顔と云つても、その映画も写真も（実物は勿論）見たことがない人にはどの様な顔なのかさつぱり見当がつかない。また或ことを表現するのに時間をかけすぎると聴手は興味を失つてしまふ。それ故に話者は要領よく手づ取り早い表現をしなければならぬ。そのためには、自分の言葉が意に満たなくてもがまんするのである。

さて、聴者は此の女兒の言によつて自己の脳裡に喚起せられる表象をたどつて、彼女の云はんと欲して居るものが何であるかを察知する。其処で聴者が「アア、カマスネー」と云えば、彼女はそれが「カマス」と称する物であつたことを思ひ出すのである。然しながらウロオボエは最後まで訂正されないまゝのこともある。

「ピーチーエーですな？」「ピーチーエーですたい。」「似た様なもんですたい。」

遠藤周作なる人は或所(二四)で次の様なことを述べて居る。所はフランスである。母親が二人の小さな女兒と共に汽車に乗つて居る。窓の外を眺めながら姉娘が「おや、山の上にきれいなお城が見えるわ。のぼりたいわねえ」と叫ぶ。すると妹も窓にしがみついて、「まああたち、あんな処にのぼつたら、おちんこちぼんちやふわ」と答えた。此の性別に係りない一般的表現は「たじろぐ、こわい」の意味なのだが、此の四つ位の小ちやな女の子は遊び仲間の鼻たれ小僧から聞き覚えのだらう……。

人はかくの如くにして語彙語法を蓄積し、また運用する。此の故に種々の等同性が生ずるのである。我々の理解は此の基盤に立つ。但し、理解とは云つてもその内容が話者の意圖した通りであるとは限らない。時には誤解さへもあり得るのである。ソシュールは此処に言語学的同一性(二五)なる概念を導入して居るが、それは例へば一九五一年版のC・O・Dなるもののコピーの相互間に見られる如き同一性であり、俗に「同

じ」と云うのを難しく表現したにすぎない。

×

宍岐の島の言語はアクセントに於て二つのグループに分けることが出来る。これを仮にAグループ、Bグループと名づけるならば、花、雨等の二音節語に於てAグループは低高型、Bグループは高低型のアクセントを持つて居る。然しながら例へば花をハナと云うか、ハナと云うかの差異は、それが別語であるとの意識ともなわず、Aグループの個人とBグループの個人との間に理解が成立する。これは何故であらうか。アクセントが日本語に於ては必ずしも重要な形態として意識されないこともその原因の一つであらうが、此等の語の意味を場面が都合よく補助してくれることがその最も大きな原因であらう。即ち部分的には種的等同性の幾分か稀薄なるものを含みながらも全体的には俗に云う同じ表現として受容されるからであらう。

大塚博士の云わるゝ如く、偶然として働く知識言語なるものが若し存在するとすれば、所謂誤用、誤解及び方言なるものは如何にして生ずるのであるか。人は言語に於ける誤解、誤用を他人から笑はれ、或は他人が同様な場面に於て如何に表現するかを知る等のことによつて自己の言語習慣を改めるのが普通である。我々はこれを、正しい形が「団体の知識言語」に存在するからであるとか、「言語」の拘束力によるとか等と解釈してはならない。何故ならば、それが個人をはなれて客観的に存在すると大塚博士が誤解して居られないとしても、それは其の存在の座の曖昧な觀念的構成物にすぎないからである。

要するに、「知識言語」なるものは現実的完成物としては何処にも存在しない。それは精神科学、社会科学の了解の一方法としての類型的認識の所産にすぎず、それが隠然として個人に働きかけると云うが如きは単なる比喩として以外には受取ることが出来ないのである。

註

- | | | |
|------|------------------------------|---------|
| (一) | 英語學論考 | 八三頁 |
| (二) | 意味論 | 一七五頁 |
| (三) | 前掲書 | 八三頁 |
| (四) | 前掲書 | 八四頁 |
| (五) | 前掲書 | 一七五頁 |
| (六) | 前掲書 | 八三頁 |
| (七) | 前掲書 | 八三頁 |
| (八) | 前掲書 | 一六八頁 |
| (九) | 前掲書 | 八三一―八四頁 |
| (一〇) | 前掲書 | 八四頁 |
| (一一) | 前掲書 | 八四頁 |
| (一二) | 前掲書 | 八四頁 |
| (一三) | 英文法論考 | 五頁 |
| (一四) | 國語學原論 | |
| (一五) | 雜誌「群像」(昭二七、三月号)「フランスの女學生・俗語」 | 一四四―五頁 |

ソツシュエールのラングは一般には小
林博士の訳に従つて「言語」と云は
れているが大塚博士はこれを「知
識言語」となつて居られる。